

時代小説
定点観読

清原 康正

戊辰戦争は慶応4年（1868）

8）正月3日の鳥羽伏見の戦いから始まった。この年の陰曆3月19日に、日本海の隠岐島で島民たちが蜂起して松江藩の役人たちを追放、自治政府を樹立した。1871年のパリ・コミューンより3年早い、世界初の自治政府であった。本書（光文社・1800円）は、この民衆蜂起を描いた著者の歴史小説である。

島前と島後からなる隠岐は松江藩が治めており、島後の西郷に陣屋が置かれていた。主人公は、島後・加茂村の庄屋の長男・井上登介。嘉永6年（1853）、数え18歳の時、島後に異国船が出現して島中が緊張に包まれるところから物語が始まる。ペリー来航の4カ月前の黒船騒動を通して、当時の状況が簡潔な筆致で明らかにされている。幕末維新の動乱期を背景とする長編だけに、時と人の

世界初 隠岐島の自治政府描く

流れを物語のリズムを壊すことなく描き出した点を評価したい。

京都で2年間、倒幕と天皇親政の復活という尊王攘夷の思想を学んだ登介は、帰島後、松江藩の仕打ちに耐えかねて、他の若き庄屋たちと藩役人の放逐に立ち上がる。隠岐の島民の視点から明治維新を展望する面白さがある。

三権分立の自治政府は、その後、松江藩と新政府の裏取引による松江藩の支配権奪回で同志14人の犠牲者を出すこととなるのだが、年貢半減を布告した新政府の裏切りなど権力の醜悪さに絶望する過程も描出されている。隠岐で医業を営み、大正13年（1924）3月に88歳で死去した登介の晩年の心境にも触れられている。

物語の中で赤報隊に触れて「島崎正樹」の名前が出てくる。島崎藤村の『夜明け前』の主人公・青山半蔵で、同じ時期に西の隠岐島で夢ならなかった男がいたことを知ることができた。登介たちの自治政府のありようから、変革とは何かと現代日本の政治を検証する上で刺激を受ける渾身の力作といえてよい。

（文芸評論家）